

随 想



大学院の育成を

相 山 正 孝*

わが国の鉄鋼生産の伸展はまことにめざましい。その生産量は急勾配で上昇しつつあることはいうまでもないが、生産技術の上からも、近頃の合言葉である技術革新そのものをもつとも具現しているのが鉄鋼界ではないだろうか。筆者のように大学の中にいる者が工場へときどきおじやますると、そのたび毎に、工場の外観も設備も増設、更新され変貌してゆくのをみて、ただもう感嘆するばかりである。そして鉄鋼生産工場の発展ぶりがすぐそのままわが国の経済成長をもつとも端的に示すことをその現場で感じさせられる。

このようにわが国の鉄鋼の生産は躍進してきたし、これからも躍進しつづけられるであろう。ところでその躍進を支える生産技術はどうだろうか。もちろんその技術水準も高いことはいうまでもない。しかしその水準を高めるための努力がこれまでどのように行われてきたかを考えてみる必要がある。日本の技術者によつてなし遂げられた技術向上についての数々の成果のあることはいうまでもないが、それ以上に外国から導入された技術が多いことは否定できない。鉄鋼協会これまで発行されてきたアブストラクト誌にわが国の工場設備を紹介する写真が掲載されるが、編集委員会で集まつた写真原稿をみると国産設備のあまりにも少ないことのため息をつくのが習慣みたいになつている。これはなんとかならないものかと考えさせられてしまうのである。

生産技術は一国で独占できるものではなく世界共通に駆使されるものである以上、世界的視野で技術水準を保持すべきであることは当然である。また鉄鋼生産技術陣の人口からいつてもこれまでのわが国のそれは世界の数%にしかすぎないことが想像され、現代技術に占める比率もそんなに多くはあり得ないと考えられ、外国技術導入もまた止むを得ないと思われる。ただ問題は技術向上のためになされた世界中の寄与のうち、わが国技術陣が、どれ程のシェアーを持ち得たかということである。この点で不十分であつたとすれば、とくにここで考えさせられるのは技術改善のための研究体制のことである。

最近の傾向として各会社では立派な研究所がぞくぞく建設されている。研究の重要性が認識され、わが国も技術的一流国たる要件が備わりつつあることは喜ばしいことである。学会で発表されるすぐれた研究成果が大学関係者に多いような国は後進国だと喝破した方があるが、わが鉄鋼協会もこの後進国的

* 本会常務委員 東京大学教授 工博

様相が残つているとしても、間もなく先進国並みになることが期待される。しかし経費の貧弱な大学の研究設備が、会社の研究所のそれに比較して相対的に劣悪化することが現実に起りつつあるが、これについてはここでは問題を提起するに止めておく。

くり返して恐縮だが最近の技術の進歩はめざましい。現在の高水準の技術が外国技術に支えられたせい伸び状態であるとするならば、ぜひ腰のきまつた底力のあるものにする必要がある。それには優秀な技術者を養成しなくてはならぬ。それもこれまでのような一通りの基礎的および実地的知識を収得しただけでは不十分で、さらに専門分野に隣接する境界および境界外領域に渉る広い視野を持つた技術者なり研究者が必要である。現在の水準を一段とつき上げるには高いポテンシャルを身につけた技術者が要望される。現在の大学は高度に進歩した知識技術を教育するには修学年限が短かく、また画一教育に流れ易い。この短所を補うものが大学院である。

ところが大学院の現状はどうだろうか。大学院の予算不足による設備の貧弱さはここではふれないことにするが、それよりも問題は学生の数である。定員のやつと半分程度の学生数では大学院が甚だ不振であるといわなければならない。その原因にはいろいろ考えられるが、大学院に対する産業界の認識の不足も大いに関係があると思われる。大学院の振興という声は産業界に殆んど聞かれないのはどうしたことだろう。技術者、研究者の長期計画は数の問題も重要であるが、質の問題もそれに劣らず大切である。将来後進国の鉄鋼生産が伸びてきたときのわが国の対策としては鉄鋼の質でゆこうとするのであれば人の方も数以上に質が問題であるのではなからうか。この質の問題解決に大学院は大いに寄与することができると考えられる。基礎的学力と境界外領域知識とを身につけた人を産業界がもつと要求しなくては先進国並みとはいえないのではないか。鉄鋼専門家になるには大学院ではむしろ非鉄金属関係の勉強をした方がより将来性があるとも考えられる。

幸い家庭経済も最近はよくなり学部卒業生の大学院志望の数が多くなりつつある気配がうかがわれる。この機に業界の御後援を期待したい。青い実のうちにもぎとらないで残しておく分も十分に考えてほしいものである。近頃学部や大学院に対し無条件の奨学生制度の申込みがかなりあり喜ばしいことであるが、鉄鋼業界の大手筋からはあまり申入れがないのはどうしたことだろう。あまり率直に申上げてまことに申訳ないが、こんなところにも考えて戴きたいことが残つているという意味で甚だ雑言をぶちまいたことをお詫びする次第である。